

Nara National Museum

奈良国立博物館 だより

第65号

平成20年 4・5・6月



金剛頂経瑜伽十八会指帰〈中尊寺経〉(当館) 特別陳列「建築を表現する」より

特別展

天馬

—シルクロードを翔ける夢の馬—
4月5日(土)~6月1日(日)
東・西新館

国宝 法隆寺金堂展

6月14日(土)~7月21日(月・祝)
東新館

特別陳列

建築を表現する

—弥生時代から平安時代まで—
6月14日(土)~7月13日(日)
西新館

特集展示

繡仏と染織の美

6月14日(土)~7月13日(日)
西新館

平常展

仏教美術の名品

本館 平常開館
西新館 6月14日(土)~7月13日(日)

中国古代青銅器

本館 平常開館

特別展

天馬

—シルクロードを翔ける夢の馬—

4月5日(土)～6月1日(日)

東・西新館

主催：奈良国立博物館、
(財)全国競馬・畜産振興会



ペガサス装飾付柱頭片 フォーリ・インペリアル博物館（イタリア）



赤像式クラテル（部分）
アグロ・ファリスコ博物館（イタリア）



化粧皿〔有翼馬〕 個人蔵



ペガサス飾付ブローチ メトロポリタン美術館（アメリカ）



鍍金馬 茂陵博物館（中国）



●電首水瓶 東京国立博物館
（法隆寺献納宝物）



●聖徳太子絵伝（部分） 橘寺



●四騎獅子狩文錦（部分） 法隆寺

馬は人類のパートナーとして長い歴史とともに歩いてきた。より遠くへ、より速く、そして力強く、美しく…。人類の飽くなき夢と理想を担い、馬は国家や文明を支えてきた。天馬はこの夢をかなえる究極の生き物として、紀元前二千年以上もの昔に想像され、シルクロードを介して各地に広がりました。

最も有名な天馬は、ギリシア神話に登場するペガサスです。英雄を乗せ、怪獣の退治に活躍するペガサスの姿は、紀元前六～四世紀頃のギリシア陶器に好んで描かれています。本展では、イタリアやアメリカから代表的な壺絵が出品されます。また、ローマのアウグストゥス皇帝が建てたマルス神殿から出土し

た大理石製のペガサス装飾付柱頭片は、まだ現地でも公開されたことのない作品として注目されます。

一方、アジアの地では、ササン朝ペルシアにおいて天馬は神聖な動物のついでに数えられていました。法隆寺に伝わる四騎獅子狩文錦は、そのペルシアに端を発する要素を取り込み、中国の初唐頃に作られたものです。シルクロードの交流を象徴するこの名品に加え、中国・新疆ウイグル自治区で発見された類似の錦の断片も展示します。

そのほか中国からは、神仙世界に息づく天馬の姿を描いた金銀象嵌筒形金具（河北省文物研究所）や、「天馬」と称えられた汗血馬の造形として名高い鍍金馬（茂陵博物館）、天馬

を吉祥文様の一つとして表す銅鏡などの名品も見逃せません。

さらに、日本の仏教絵画については、仏伝中の釈迦の愛馬カントカをはじめ、聖徳太子の乗ったという甲斐黒駒、弘法大師がお釈迦様に会うために乗ったという白馬など、翼がなくとも飛ぶ「天馬」があるかと思えば、密教のほとけたちが坐る翼の生えた馬もいるなど、あまり意識されてこなかった、隠れた「天馬」が見出されます。

国内外、時代やジャンルを超えて、ユーラシア大陸を舞台にこれだけの天馬が集まるのは、世界でも初めてのことです。シルクロードの東の終着地とも言われるこの奈良から、文化の絆をたどる胸ときめく旅に出かけましょう。

（吉澤 悟）

特別展

国宝 法隆寺金堂展

6月14日(土)～7月21日(月・祝)

東新館

主催：奈良国立博物館、法隆寺、朝日新聞社

現存する世界最古の木造建築として著名な法隆寺金堂には、わが国の仏教文化の黎明期である飛鳥時代の美術の粋ともいえるべき仏像や工芸品が存在し、濃密な宗教的空間を創り出しています。仏像を安置する須弥壇は漆喰塗りの土壇ですが、傷みが目立つようになり、このほど本格的な修理が行われる運びとなりました。壇上の諸仏は全て一時的に避難しますが、法隆寺当局の英断により、そのうち九体の仏像と三基の台座、二個の天蓋、飛

そして今後二度とないでしょう。クスノキ材を用いた木彫で、大陸風の重厚な表情、美しい彩色や唐草文様を透彫りした金銅製の金具、光背の銘文など、見どころの多い作品です。

このほか、運慶の四男康勝が原型制作を手がけた阿弥陀三尊像(重文)や、平安時代に吉祥悔過会の本尊として造立された毘沙門・吉祥天像(国宝 6/14・29展示)など、名品の数々を存分にご堪能いただきたいと思います。

(岩田茂樹)



●増長天立像 7/1～21 展示



●持国天立像 7/1～21 展示

天を描いた内陣小壁の壁画が二面、そして昭和の日本画壇の巨匠たちが手がけた十二面の再現壁画を博物館で公開できることとなりました。

なかでも、須弥壇の四隅に安置される四天王像(国宝)は、七世紀の半ばに制作された現存する日本最古の四天王像で、広目天像と多聞天像のみ過去に展覧会に出陳されていますが、四体そろってお出ましになるのはもちろん初めて、

特別陳列

建築を表現する

— 弥生時代から平安時代まで —

6月14日(土)～7月13日(日)

西新館



●信貴山縁起絵巻〈飛倉巻〉(朝護孫子寺)



●宝塔形経筒〈伝福岡県出土〉(当館)



●銅板法華説相図 (長谷寺)

奈良は古建築の宝庫です。世界最古の木造建築である法隆寺、世界最大の木造建築である東大寺大仏殿をはじめとして、正倉院宝庫や薬師寺東塔、唐招提寺、新薬師寺など、古代に造立された多くの建築物が、今も往時の姿を伝えている稀有なまちといえます。これらの古い建物群が、その中の貴重な仏像や宝物を守ってきたことが、世界遺産登録につながったといえましょう。しかし、これらの木造建築物のほとんどは、長い年月の間に大規模な修理を受けています。解体修理の際に建築部材を検討すると、屋根の形を改変したり、新しい部材を加えて補強したりして、必ずしも古代の形そのままではないことがわかります。

一方で、考古学の発掘調査では、すでに柱穴や礎石など失われた建築物の痕跡が多く発見されます。それらは建築物の基礎部分であることが多く、倒壊した建築物の一部が奇跡的にそのまま出土した山田寺の回廊などの例を除いて、上部構造についての情報はほとんどありません。

そこで今回は、古代の人々が絵画や器物に写した建物に目を向けます。「写す」とはいっても、彼らが見た建物をそのまま精確に描写したもの、デフォルメして表現したもの、また、想像上の建築物を描いたものなどさまざまです。しかし、現在失われてしまった古建築を復元する際には、古代の人々が遺したイメージは重要な手がかりになることが多くあります。

本展では弥生時代から平安時代に至る、さまざまな目的でさまざまな材質に表された古い建物たちを紹介いたします。この展示を観覧された後、今に残る奈良の古い建物群もあわせてご覧になれば、また違った印象を味わえるのではないかと思います。

(岩戸晶子)

奈良は古建築の宝庫です。世界最古の木造建築である法隆寺、世界最大の木造建築である東大寺大仏殿をはじめとして、正倉院宝庫や薬師寺東塔、唐招提寺、新薬師寺など、古代に造立された多くの建築物が、今も往時の姿を伝えている稀有なまちといえます。これらの古い建物群が、その中の貴重な仏像や宝物を守ってきたことが、世界遺産登録につながったといえましょう。しかし、これらの木造建築物のほとんどは、長い年月の間に大規模な修理を受けています。解体修理の際に建築部材を検討すると、屋根の形を改変したり、新しい部材を加えて補強したりして、必ずしも古代の形そのままではないことがわかります。

一方で、考古学の発掘調査では、すでに柱穴や礎石など失われた建築物の痕跡が多く発見されます。それらは建築物の基礎部分であることが多く、倒壊した建築物の一部が奇跡的にそのまま出土した山田寺の回廊などの例を除いて、上部構造についての情報はほとんどありません。

そこで今回は、古代の人々が絵画や器物に写した建物に目を向けます。「写す」とはいっても、彼らが見た建物をそのまま精確に描写したもの、デフォルメして表現したもの、また、想像上の建築物を描いたものなどさまざまです。しかし、現在失われてしまった古建築を復元する際には、古代の人々が遺したイメージは重要な手がかりになることが多くあります。

本展では弥生時代から平安時代に至る、さまざまな目的でさまざまな材質に表された古い建物たちを紹介いたします。この展示を観覧された後、今に残る奈良の古い建物群もあわせてご覧になれば、また違った印象を味わえるのではないかと思います。

(岩戸晶子)

宿院仏師展のその後

鈴木喜博（当館上席研究員）

特別陳列「宿院仏師」の展示から三年が過ぎた。東新館の展示室に三十体余りの白木の仏像が林立し、像内の銘文を写真パネルで紹介する硬派の展示に、企画した筆者は満足感で一杯だった。それは戦国時代南都の地域史の掘り起こしでもあり、古都奈良の地方文化を顕彰する国立博物館のもう一つの顔でもあった。その後、宿院仏師の仏像がいくつか見つかり、仮説を立てて構築してきた宿院仏師研究が大きく前進した。①神奈川県立歴史博物館が保管する薬師如来坐像（セゾン現代美術館所蔵 図1）は珍しく民間に流れた遺品である（天文十五年＝一五四六 源次作）。細かく髪筋を刻む螺髪は豆粒状のものと違うが、作風は源次前期の様式と矛盾しない。彼らは番匠の出身であり、仏像の体内に工房構成員の俗名を記し、今日も地名が残る奈良市宿院町に工房を構え、「なら宿院仏師屋」の屋号を



図2 地藏菩薩坐像 観音寺



図1 薬師如来坐像
セゾン現代美術館



図4 聖観音立像 大楽寺



図3 釈迦如来坐像 伝香寺



図5 大日如来坐像 勝林寺

名乗る仏師集団であった。②宮崎・日南市の長久寺虚空蔵菩薩坐像は『史迹と美術』（七六七号 平成十八年）で紹介されたもの。「南都北室大仏所（師）」や源衛門らの銘文からすると、彼らの工房は三条通り北の宿院町から同南の北室町へ移転したかにみえる。天正二年（一五七四）織田信長の命によつて正倉院の蘭奢待と呼ばれる香木を切った椿井式部（成慶）は北室町に住んでいた。③奈良・安堵町の観音寺地藏菩薩坐像（図2）は既発表（平成九年）の小品なのだが、神田雅章氏による再評価を通して『仏教芸術』二九二号 平成十九年、宿院仏師と下御門仏師の間には歴史的断絶がないことが実証された。仏師源次は活躍の最末期に宿院町を立ち退き、南の北室町に住んで北室大仏師と名乗り、その息子源四郎は北室町の隣、下御門町で工房を構えたというのである。先の展覧会では宿院仏師は戦国時代の奈良仏師として特化して展示し、下御門仏師の作例は伝香寺釈迦如来坐像（図3）一件にとどめた。下御門仏師が宿院仏師に連続しないという前提に立つ展示だったからである。今後、仏師系図の修正が必要になるが、下御門仏師の優れた作例である伝香寺像が、表現および構造技法の点から宿院仏師の仏像と一線を画すのは変わるものではなく、両工房の盛衰のなかでこれをどのように解釈すべきか、問題はまだ解決されていない。④大分・宇佐市の大楽寺聖観音立像（図4）は銘文が確認されていないものの、源次の作風に酷似する。昨年の特別展「神仏習合」の宇佐方面返却の折に大分県立歴史博物館の渡辺文雄館長からその情報を得たのだが、これで九州の宿院仏師関係の仏像は宮崎（三件、佐賀（一件）に次ぎ、五件となった。宝冠・胸飾の装身具が江戸時代の製作だから、本像はその後に当地に伝わったかとも考えられる。憶測すると、宿院仏師の仏像は江戸時代になると、ひとつのブランドとして再び需要に応えたのかもしれない。⑤奈良・斑鳩町の勝林寺大日如来坐像（図5）は銘文が確認されていないものの、宿院仏師源三郎の作とみてよい等身大の坐像である。それは当館の

収蔵庫に長く寄託されていた仏像であり、筆者にとつては「灯台下暗し」といふべき最近の発見である。ところで先の展覧会がきっかけとなって宿院仏師の仏像の修理に（財）住友財団から助成がついた。それは自治会が所蔵する⑦丹後庄町（大和郡山形）松本寺釈迦如来坐像（天文九年＝一五四〇 図6）である。損壊寸前の台座（蓮華座）の修理であったが、解体中に銘文が確認されており（図7）、本像の製作背景には東大寺仏性院との関係が明らかになった。なお修理技術者の所見によると、本体・台座の漆箔仕上げは当初の可能性があるというところから、宿院仏師の仏像は初期には素地仕上げばかりではないということになる。最後に新進の研究者による下御門仏師の研究を紹介しよう。それは下御門仏師に豊臣家のお抱え仏師としての意義を考察するという論考であり（大河内智之「和歌山県立博物館 研究紀要」第一三三号 平成十九年、意欲的な考証は先の神田論文と同様、宿院仏師展その後の大きな成果といえるだろう。宿院仏師研究の継承に筆者は大きな喜びをもつて期待している。

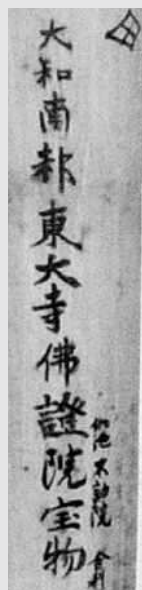


図7 銘文



図6 釈迦如来坐像 松本寺（修理後）



爵 当館(坂本コレクション)



○不動明王坐像 正寿院



○誕生釈迦仏立像 悟真寺



○千手観音立像 妙法院



●伝行賢坐像 興福寺

平常展

仏教美術の名品

本館 第1～13室

彫刻

第1室

【大和の仏たち】●木造薬師如来立像(元興寺)●木造薬師如来立像(称名寺)●木造伝明星菩薩立像(弘仁寺)●木造地藏菩薩立像(万福寺)●脱活乾漆・木造梵天立像●脱活乾漆・木造伝教脱菩薩立像以上、秋篠寺)●木造持国天立像●木造多聞天立像●木造西大門勅額(以上、東大寺)●脱活乾漆舍利弗立像●脱活乾漆目犍連立像●脱活乾漆緊那羅立像(以上、興福寺)●木造十一面観音立像(勝林寺)●木造十一面観音立像(地福寺)●木心乾漆伝義淵僧正坐像(岡寺)●木心乾漆阿閼如来坐像(西大寺)●木造紅玻璃阿彌陀坐像(当麻寺)●木造伝行賢坐像●木造大黒天立像(以上、興福寺)●木造大黒天立像(西大寺)●銅造薬師如来坐像(当館)●木造菩薩立像(金竜寺)

第2室

【注目の逸品】

●木造阿彌陀如来坐像(東大寺)

【興福寺伝来の四天王像】

●木造増長天立像●木造多聞天立像(以上、当館)●木造広目天立像(興福寺)

【観音菩薩】

●木造観音菩薩立像(観心寺)●木造千手観音立像(園城寺)●木造千手観音立像(妙法院)●木造十一面観音立像(元興寺)

【迎講の阿彌陀仏】

●木造阿彌陀如来立像(裸形)(浄土寺)

第3室

*閉室(12月)

第4室

【ガンダーラの彫刻】石造菩薩立像、石造仏伝図浮彫(以上、当館)

【中国石窟寺院の仏像】石造如来頭部(雲岡)●石造菩薩頭部(華嚴寺)●石造菩薩頭部(響堂山)●石造螺髻像頭部(響堂山)(以上、個人)

【中国・朝鮮半島の金銅仏】銅造誕生釈迦仏立像●銅造押出五尊仏●銅造供養者坐像●銅造観音菩薩立像●銅造力士立像●銅造力士立像(以上、個人)●銅造二仏並坐像●銅造如来立像(以上、当館)●銅造如来立像(光明寺)

第5・6室

【中国の仏像】木造菩薩坐像●石造仏坐像●木造諸尊仏像●石造三尊仏像●石造五尊碑像●石造仏立像●石造浄土碑像(以上、個人)●石造十一面観音立像●石造三尊仏像(以上、当館)

第7室

【檀像】●木造十一面観音立像(海住山寺)●木造観音菩薩立像(本山寺)●木造十一面観音立像(当館)●木造弥勒仏坐像(東大寺)

第8室

【注目の逸品】

阿彌陀如来坐像

東大寺
木造 漆箔
平安時代(十二世紀)
重要文化財



腹前で定印を結んで坐する阿彌陀如来像。丁寧に刻まれた小粒の螺髪、眼を伏せた穏やかな表情など、繊細優美な平安後期様式の典型を示す優品だが、着衣の襷の数もみられ、鎌倉時代に近い頃の作と推定される。台座の修理銘(江戸時代)から、かつて聖武天皇陵の前に存在し、明治初年に廃寺となつた眉間寺の本堂に、本尊としてまつられていたことがわかる。

(稲本泰生)

第10室

【地藏菩薩】木造地藏菩薩立像(十市町自治会)●木造地藏菩薩立像(春覚寺)●木造地藏菩薩立像(新薬師寺)●木造地藏菩薩立像(長命寺)

第11室

【大日如来】木造大日如来坐像(元興寺町)●木造大日如来坐像(西城戸町)

【僧形像】●木造伝龍猛菩薩立像(泰雲院)●木造僧形坐像(南明寺)

【神像】木造大將軍神坐像(当館)●木造男神坐像(観音寺)

【聖徳太子像】●木造聖徳太子立像(成福寺)●木造南無仏太子立像(法起寺)

第12室

【動物彫刻】●木造狛犬●木造獅子●木造獅子(以上、当館)●木造狛犬手向山八幡宮

第13室

【明王像】木造五大明王坐像●銅造不動明王立像(以上、当館)●木造不動明王坐像(正寿院)●木造不動明王坐像(園城寺)●木造不動明王立像(個人)

【天部像】●木造四天王立像(海住山寺)●木造十二神将立像(辰・未(室生寺)●木造増長天立像(法明寺)

平常展

中国古代青銅器 坂本コレクション

本館 第14・15室

中国古代の商(殷)から漢時代に製作された、青銅器の逸品を展示しています。

爵、觚、觶、長頸尊、觚形尊、尊、方彝、卣、罍、鼎、鬲、鬲簋、豆、盤、匜、盥缶、壺、鐘、鈃、扁壺、蒜頭壺、甗、鍔、博山炉、鎮子、鏡、釵など(当館)



大方等大集經菩薩念仏三昧分巻第九 当館



◎文殊菩薩像 当館



◎一遍聖絵〈第五巻〉 清浄光寺



◎弥勒如来坐像(経筒) 当館

特別陳列

建築を表現する

弥生時代から平安時代まで

6月14日(土)～7月13日(日)

西新館

【弥生時代】清水風遺跡出土絵画土器(複製)
【縄文時代】縄文遺跡出土絵画土器(田原本町教育委員会)・唐古・鍵遺跡出土絵画土器(京都大学総合博物館)・中曾司遺跡出土絵画土器(橿原市教育委員会)

【古墳時代】佐味田宝塚古墳出土家屋文鏡(複製)
【飛鳥時代】東大寺山古墳出土家形埴輪(複製)
【奈良時代】天理大学附属天理参考館、原品文化庁、

特集展示

繡仏と染織の美

6月14日(土)～7月13日(日) 西新館



今回の平常展(工芸部門)では、館蔵・寄託品の中から繡仏及び染織品を特集して展示します。

繡仏とは、刺繍で表したほとけのことです。仏像やほとけを示す文字(種子)を、様々な色に染めた糸や人毛を用いて刺繍で表す繡仏は、紙や絹に筆で表される仏画に比べ多くの手間を要します。しかしながら、古代には多くの巨大繡仏が作られ、大寺院の伽藍を飾っていました。我が国現存最古の繡仏である天寿国繡帳(国宝・中宮寺蔵)は、古代寺院を飾った大繡仏を偲ばせる遺例として今なお鮮やかな輝きを放っています。また中世には浄土教の隆盛とともに、多くの繡仏が作られました。これらは死者の冥福を弔う追善や生前に死後の往生を祈る逆修など個人的な願意に基づくものが多くを占め、阿弥陀仏を表した小品が中心になり

人見塚古墳出土家形埴輪(天理大学附属天理参考館)・丸塚古墳出土家形埴輪(城陽市歴史民俗資料館)

【飛鳥時代】玉虫厨子(複製)(セゾン現代美術館、原品法隆寺)

【白鳳期】銅板法華説相図(長谷寺)・御墓山窟跡出土宮殿形陶製品(伊賀市教育委員会)

【奈良時代】百万塔、瓦塔(以上、当館)

【平安時代】信貴山縁起絵巻(飛倉巻)(朝護孫子寺)・華嚴五十五所絵(当館)・華嚴五十五所絵巻(東大寺)・法華経宝塔曼荼羅(談山神社)・字宝塔法華経巻第五、金剛頂経瑜伽十八会指帰(中尊寺経)、宝塔形経筒(伝福岡県出土)・黒漆大般若経厨子(以上、当館)

ます。加えて、人毛が頻りに用いられるのが特徴で、並々ならぬ願意が伝わります。

このほか、倭錦を用いた赤地蓮池水禽文倭錦打敷(重文・般若寺蔵)やこれと同系統の裂を内張りに用いた手箱、鏡箱(国宝・熊野速玉大社古神宝類のうち、熊野速玉大社蔵、古代皮革工芸の白眉である、熊野速玉大社蔵、草(国宝・東大寺蔵)など優品の数々を展示します。

この機会に染織工芸の優くも美しい世界をお楽しみ下さい。

(清水 健)

●天寿国繡帳(中宮寺)、刺繍釈迦・阿弥陀二尊図(当館)、刺繍阿弥陀如来像(個人)、刺繍阿弥陀三尊図(真正極楽寺)、刺繍阿弥陀三尊来迎図(個人)、刺繍阿弥陀三尊来迎図、刺繍種子阿弥陀三尊図(以上、当館)、刺繍種子阿弥陀三尊図(禅林寺)、刺繍種子阿弥陀三尊図(大福田寺)、刺繍種子阿弥陀三尊図(個人)、刺繍阿字図(聖衆来迎寺)、刺繍善導大師像(厨子入り)(当麻寺念佛院)、刺繍三昧耶幡(図版) 錦幡(当館) ●錦幡(西明寺) ●葡萄唐草文染草(東大寺) ●赤地蓮池水禽文倭錦打敷(般若寺)、神護寺経帙(細見美術財団) ●桐時絵手箱(熊野速玉大社古神宝類のうち) ●鏡箱(熊野速玉大社古神宝類のうち) (以上、熊野速玉大社)

平常展

仏教美術の名品

《考古・絵画・書跡》

6月14日(土)～7月13日(日) 西新館

考古

土偶(山形県杉沢遺跡出土)、人物線刻裝飾付子持壺(○西文帯神獸鏡(天和天神山古墳出土)(以上、当館)、銅鐸(妙国寺)(妙国寺) ●粟原寺伏鉢(談山神社) ●銅装太刀・玉・銅鏡(東大寺金堂鎮壇具のうち) (東大寺) ●玉類(元興寺塔跡出土)(元興寺、素弁蓮華文軒丸瓦、奈良県横井廃寺出土)、単弁蓮華文軒丸瓦、均正唐草文軒丸瓦(奈良県山村廃寺出土)、単弁蓮華文軒丸瓦(奈良県山田寺出土)、複弁蓮華文軒丸瓦(奈良県法隆寺出土)、複弁七葉蓮華文軒丸瓦、花弁文軒丸瓦(奈良県山村廃寺出土)、複弁蓮華文軒丸瓦(奈良県東大寺出土) ●佐井寺僧道業墓出土品、○山代忌寸真作墓誌、行基舍利瓶残片、灰釉平瓶(奈良県壺坂寺院出土) ●青磁碗・皿(鳥根県荻村古墓出土)、飛鳥文陶製外筒(伝愛媛県北条市出土)、瓦経(福岡県飯盛山経塚出土)(以上、当館) ●銅板経(大分県長安寺経塚出土)(長安寺)、銅経筒・松喰鶴方鏡・銅製六器・独鈷杆・白磁盒子ほか(山口県長門一ノ宮経塚出土) ●銅製経筒・滑石製外筒(伝福岡県出土) ●滑石製弥勒如来像(鉢形嶺経塚出土)(以上、当館)

絵画

●六道絵(衆合地獄)(聖衆来迎寺) ●釈迦阿弥陀来迎図(雲迎寺) ●九品来迎図(下品中生) 瀧上寺) ●阿弥陀聖衆来迎図(心連社) ●阿弥陀五尊像(一乗寺) ●当麻曼荼羅(西教寺) ●一遍聖絵(第五巻 清浄光寺) 理趣経曼荼羅図(当館) ●両界曼荼羅(南法華寺) ●五明王像(一乗寺) ●両頭愛染曼荼羅(当館) ●文殊菩薩像(当館) ●普賢延命像(当館) ●千手観音像(金峯山寺) ●十二天像(地天)(西大寺)

書跡

○大毘婆沙論卷第二十三(五月一日経)(東大寺) ●大毘盧遮那成佛神變加持経(吉備由利願経)(西大寺) ●法華経(丹生都比売神社) 紺紙金字法華経(興聖寺) 大方等大集経巻第九、大般若経(快円一筆経、如意輪法(以上、当館) 大塔供養願文(額安寺) ●星尾寺縁起(高山寺) ●五山衆試文稿(竹林院)

パネル展示

地下回廊

パネル展示

地下回廊

●国宝 ●重要文化財
以上すべての展示において、出陳作品を一部変更する場合があります。

【表紙写真解説】

金剛頂経瑜伽十八会指帰

《中尊寺経》

当館 紺紙 金銀交書 縦二六・〇 長四八六・六 平安時代(十一世紀)

紺色に染めた楮紙に、一行おきに金と銀で交互に経文を書写した経巻。見返しには、金銀泥をふんだんに用い、釈迦説法図を描く。図の中央には釈迦三尊とそれを囲む供養者がおり、その背後には、鴟尾を乗せた瓦屋根の大きな楼閣が、正面と両脇に合計三棟みえる。これは、奥州藤原氏の初代藤原清衡(一〇五六―一一二八)が発願した一切経(中尊寺経と呼ばれる)のうちの巻。中尊寺経はいくつかの経巻に残る奥書等から、永久五年(一一一七)に書写が始まり、八十九年をかけて完成されたと推定されている。平安時代後期に各所で数多く作られた装飾経の中でも、特に美しいものとして知られる。(野尻 忠)

展示の 現場から

スイスでの観音菩薩展

岩田 茂樹

(当館美術室長)

スイス・チューリヒのリートベルク美術館は、アフリカ、ラテンアメリカやオセアニア、中近東、さらにインドから東南アジア、中国を経て日本へと至る非ヨーロッパ世界の美術を収蔵・展示する。2007年春、開館50年を経て新築されたチューリッのオープン記念として、日本の観音菩薩像を紹介する展覧会が開催された。奈良国立博物館は同館とのかねてからの親密な関係から、この展覧会を共同主催することとなった。

会期は2月18日から4月9日まで。国宝・重要文化財21件を含む37件の作品で構成することとなった。コンセプトは単純明快である。日本の観音菩薩の種々相を紹介する―これに尽きる。上代の金銅仏からはじめ、平安中期に成立する六観音信仰に注目し、六種の観音の姿を彫像・画像の両方で網羅した。リートベルク側が示した出品希望リストには寺院や財団、個人等の所蔵する作品が多数含まれていたが、借用困難なものもあったため、軌道修正はしつつも、主だった作品については手をつくし、熱意をもって出品をお願いした。結果、海外における日本美術の展覧会としてはかなりのレベルの作品がそろったと自負している。世界に対し日本の文化を発信、紹介してゆくことの意義をご理解くださった所蔵者各位に深甚の敬意と謝意を表したい。

苦勞がなかったといえは嘘になるが、展覧会が好意をもつて迎えられるときはうれしい。チューリヒ市長



や前スイス大統領、在スイス日本大使らの列席のもとに開催された盛大なオープニングセレモニー、ひきつづき開始された招待客の観覧、そして翌日からの一般公開、いずれも文句なしに好評であった。

総入場者数は41,349人であったが、これはリートベルク美術館の展覧会としてレコードと聞く。会場を見ていると、多くの観覧者が静かに、ゆつくりと歩き、またじつと眺める姿が目についた。みな強い感銘を受けていることがよくわかる。マスコミにも好意的に取り上げられ、隣国オーストリアやドイツからの取材も相ついだようだ。絵画のケースに照明が内蔵されず、外からのスポット光が反射して見づらいという欠点はあったが、ディスプレイもおおむね適宜を得、展示の高さや作品の配置の間隔も申し分なかった。

ところで会場における作品解説のための題箋だが、リートベルク側の意向もあり、名称、所蔵者、時代、材質等、必要最低限の情報のみにとどめ、文章による説明は行なわなかった。それでも観覧者からのクレームがあったとは聞かない。スイスの人々にとつて、ふだんなじみのない作品ばかりであろうと思われるにもかかわらず、である。

一級の美術作品は言葉を超えるものだとあらためて思う。作品は感じるべきもので、知識のための材料ではないという意識が浸透しているのではないか。だが日本で同じ試みをしたとして、不親切のそしりを受けないという自信はない。題箋にどこまでの情報を盛り込むかは学芸員の永遠の悩みのだが、近年の日本の博物館は若干サービスの相異と割り切っている。サビスを心がけるべきか、今も心は揺れ動く。

●公開講座●

4月19日(土)「ギリシア・ローマ世界の天馬」

青柳正規 (国立西洋美術館館長)

4月26日(土)「古代世界の天馬」

吉澤 悟 (奈良国立博物館資料室長)

5月3日(土)「飛走する天馬像」

末崎真澄 (馬の博物館学芸部長)

5月24日(土)「仏教と天馬」

内藤 栄 (奈良国立博物館工芸考古室長)

※各回とも、午後1時30分～3時、当館講堂にて。

定員200名(午後1時より講堂入口で整理券を配布し、開場します)。聴講無料。

●サンデー・トーク●

4月20日(日)「仏教美術にみる空飛ぶ馬」

北澤菜月 (奈良国立博物館研究員)

5月18日(日)「中国の天馬・翼馬」

永井洋之 (奈良国立博物館研究員)

6月15日(日)「古代建築のイメージ」

岩戸晶子 (奈良国立博物館研究員)

※各回とも、午後2時～3時30分、当館講堂にて。

定員200名(先着順、午後1時30分より開場)。聴講無料。

●夏季講座●

テーマ 西国三十三所 観音巡礼

日程 8月19日(火)～21日(木)

※詳細は次号およびホームページでお知らせします。

◆奈良国立博物館賛助会

2008年4月1日現在、一般会員(個人)23名、一般会員(団体)15団体、特別賛助会員2団体、特別支援会員3団体のご入会をいただいております。

このたび、次の方々に新たにご入会いただきました。改めて御礼申し上げます。

【一般会員(団体)】

株式会社 エイアンドディー・オーディオガイド 様

【特別支援会員】

結の会 様、株式会社 読売新聞大阪本社 様、株式会社 葉園泰夢 様、株式会社 スタイルカフェ・ドット・ネット 様

※2007年12月から、賛助会員の種類に「特別支援会員」を新しく設けました。詳しくは下記お問い合わせ先へ。

◆キャンパスメンバーズ

当館は、大学等と連携を図り、博物館が所蔵する文化財を核として文化や歴史を共に学ぶ場を提供する「キャンパスメンバーズ」の制度を設けております。

会員大学等の学生および引率教職員は平常展については無料、特別展については400円(共催展の場合は別途定めるものとします)で観覧できます。(学生証および引率教職員は身分証明書の掲示をお願いいたします。)

〈会員大学等〉(2008年4月1日現在)

大阪大谷大学・大阪大谷大学短期大学部、大阪教育大学、大阪成蹊大学芸術学部、京都工芸繊維大学、京都嵯峨芸術大学・京都嵯峨芸術大学短期大学部、京都精華大学、京都大学、京都橘大学、近畿大学文芸学部、種智院大学、帝塚山大学・帝塚山高校、同志社大学文化情報学部、奈良教育大学、奈良佐保短期大学、奈良産業大学・奈良文化高等学校・奈良学園高等学校・奈良文化女子短期大学、奈良女子大学、奈良先端科学技術大学院大学、奈良大学、佛教大学、龍谷大学(五十音順)

◆賛助会・キャンパスメンバーズに関するお問い合わせは、当館の総務課 企画推進係まで。

てんじゅこくしゅうちよう 天寿国繡帳

奈良・中宮寺
絹 羅・綾・平織 刺繡 縦88.8cm 横82.7cm
飛鳥時代(7世紀)
国宝

聖徳太子が死後往生したという「天寿国」の様子を表した帳の一部が残ったもの。平安時代に成立したとみられる聖徳太子の伝記『上宮聖徳法王帝説』によれば、太子の妃・橘大女が太子の死を悼み、死後転生したとされる浄土の有様を帳2張に表し、女官に刺繡させて作ったものであるという。同書



によれば、原繡帳には亀形に4字を配したものが100箇あり、制作の経緯を述べた400字の銘文が記されていたらしい。その後繡帳は時代とともに痛み、室町時代の法隆寺の僧・聖譽が著した『聖徳太子伝暦』(聖徳太子の伝記)の注釈書『聖誉抄』によれば、鎌倉時代に中宮寺の尼僧・信如が法隆寺の蔵から原繡帳を発見し、これを譲り受けて模し、新繡帳を作ったという。その後さらに新繡帳も破損し、江戸時代に新旧両繡帳を修理し、一つの画面に任意に貼りまとめたのが現在の繡帳に当たると考えられる。

このように複雑な歴史を有する本品は、現在飛鳥時代の原繡帳の部分と鎌倉時代の模作の部分が混在しているが、紫羅の地にZ燃りの強撚糸の返し繡で表された色鮮やかな部分が当初で、紫綾及び白平絹の地に平繡主体で表されている部分が模作とみられる。当初の部分の方が色、刺繡ともによく遺っており、古代の技術の高さがうかがわれる。

なお、本品の当初の図様については、仏教に説かれる浄土を表したことは確からしいものの、阿弥陀浄土とする説、弥勒浄土とする説など諸説あって未だ結論をみていない。また当初の形状や使用法についても諸説があり、興味の尽きない問題を孕んでいる。

清水 健(当館研究員)
西新館 6月14日(土)～7月13日(日)
特集展示「繡仏と染織の美」

平常展の みどころ

しゃかあみだほっけんらいごうず 釈迦阿弥陀発遣来迎図

徳島・雲辺寺
絹本着色 縦131.8cm 横59.1cm
鎌倉時代(14世紀)
重要文化財



阿弥陀如来が菩薩衆とともに往生者を迎えに来るという光景は、死後に極楽浄土への往生を遂げたいと願う人々が生前から強く思い描いたものであり、浄土信仰が隆盛した中世には、そのイメージを具現化した来迎図の名品が数多く生み出された。とくに鎌倉時代に入ると、極楽浄土や阿弥陀来迎の様を観想する方法を具体的に説いた『観無量寿経』についての新しい解釈が試みられるようになり、それに伴って従来にない新しい形式の来迎図も様々に

創出されていった。ここに紹介する釈迦阿弥陀発遣来迎図も、こうした過程で制作されたとみられる特色ある来迎図の一本である。

縦長の画面左半分には、阿弥陀如来およびこれに従う二十七人の菩薩たちの一団が、右下に配される檜皮葺の小堂内で合掌する人物のもとへ雲に乗って来迎する様を描く。右半分には、釈迦如来および文殊・普賢二菩薩の三尊が、小堂の上空に、阿弥陀と向かい合うように浮かぶ様が描かれている。往生者に対して娑婆世界から極楽浄土へ行くことを勧める釈迦と、極楽浄土から娑婆世界の往生者のもとへと来迎する阿弥陀を対峙させるという特色ある図様は、『観無量寿経』の注釈書をもとに考案されたのだろう。

小堂内の人物は尼僧の姿として描かれており、この絵の発願者が女性だったことを示唆している。切れ長の目と小さな口をもつ見目麗しい諸尊の表情や、精緻な截金文様を施した華やかな着衣の表現には、あるいは往生を願った女性信者の好みが見え隠れしているのかもしれない。

谷口耕生(当館研究員)
西新館 6月14日(土)～7月13日(日)

開館予定(4月～6月)

■開館時間

午前9時30分～午後5時(4月25日以降の毎週
金曜日は午後7時まで)
※いずれも入館は閉館の30分前まで

■休館日

月曜日(ただし4月28日と5月5日は開館し、5月7日(火)は休館)

観覧料金

平常展(特集展示を含む)・特別陳列

	一般	高校・大学生	中学生以下
個人	500円	250円	無料
団体	400円	200円	

*団体は責任者が引率する20名以上。

特別展「天馬ーシルクロードを翔ける夢の馬ー」

	一般	高校・大学生	中学生以下
個人	1,000円	700円	無料
団体・前売	900円	600円	

特別展「国宝 法隆寺金堂展」

	一般	高校・大学生	小・中学生
個人	1,200円	800円	500円
前売	1,000円	600円	300円
団体	900円	500円	200円



〔交通案内〕近鉄奈良駅下車徒歩15分、またはJR奈良駅・近鉄奈良駅から奈良交通「市内循環」バス「氷室神社・国立博物館」下車

※当館には駐車スペースがございませんので、最寄りの県営駐車場等(有料)をご利用ください。

 **奈良国立博物館**
Nara National Museum

〒630-8213 奈良市登大路町50(奈良公園内) TEL. 0742-22-7771 FAX. 0742-22-7221 テレホン・サービス 0742-22-3331 ホームページ(URL) <http://www.narahaku.go.jp/>

「奈良国立博物館だより」は、1・4・7・10月に発行します。郵送をご希望の方は、何月号かを明記し、返信用封筒を同封して、当館の情報サービス室にお申し込みください。
※返信用封筒には宛名を明記し、長形3号の場合は90円切手を、角形2号の場合は120円切手を貼付してください。